

## 新・二都物語

松村 茂治

(その二) パース

オーストラリア大陸の形は、わが国の四国の形とよく似ている。拡大した四国の地図をこの国の地図に重ね合わせると、メルボルンは、ちょうど室戸岬のあたりに、パースは、宿毛あたりに位置することになる。室戸岬から宿毛までなら、四国の、いや高知県の、東の端から西の端への移動だから、直線距離にしてせいぜい百五十キロ程度だろう。手元にあるガイドブックを見ると、メルボルン・パース間は、優に三千キロはある。室戸・宿毛間のざっと二十倍。自分の足で歩いて行くわけではないけれど、かなり疲れそうな距離である。

メルボルンからパースへの移動は、大陸の東から西へ向けての移動ということであり、それは太陽を追っての移動ということになる。昼過ぎに、メルボルンを発った飛行機は、その日の夕方、四時頃パースに到着することになるが、それはパースの現地時間のことであって、実際には、そこに二時間の時差を加えなければならないのである。一日が二十六時間になることに、若い頃なら得をしたような気分になったろうが、今は、素直には喜べない。

午前中、メルボルンの街を歩き回ったせいもあって疲れていたのだから、機内で開いた「恐るべき空白」も、たいてい真が進まないうちに、膝の上に開かれたままになっていた。

妻に体を揺すられて目を覚ましたのは、飛行機が着陸

&lt; 新・二都物語 &gt;

態勢に入るときだった。  
 「しっかりと眠ってしまった・・・」  
 「私も、アナウンズで目が覚めたのよ。もっとも、英語の意味は分からないんだけど」  
 「移動だけで一日使ってしまう感じだ。今日は、どこにも行けないな」  
 「ここへは、ノエルのお母さんのお墓参りに来たのよ。だから、それ以外はどこにも行かないで、のんびりしているだけでいいの」  
 「パースはきれいな街だけれど、特にこれを見なくては・・・というものはないし」  
 「訪ねたいところがないわけではないけれど、どこも遠いのよ・・・」  
 「そうだな、広い国だから、どこも一日がかり、二日が必要になってしまふ。それにどこかに行くとなったら車が必要になるけど、今回は国際免許、持ってきていない」  
 「とにかくゆっくりするのが目的だから・・・」  
 空港までは、ノエルが車で来てくれることになっていた。彼女の家は、空港の管制塔が見えるような所にあるので、タクシーを拾って行くので心配しないでいいと言っただけけれど、「こんな近距離でタクシーを利用したら運ちゃんに怒られるよ！」というのが、彼女の言い分だった。

大の日本通の彼女の望みどおり、トランクには日本酒が入っているの、消費したガソリン代位にはなるだろう。その夜、日本から持ってきた純米吟醸を傾けながら、お互いの家族のこと、亡くなったお母さんのこと、そしてお墓参りのことに及ぶと、ノエルが面白いことを教えてくれた。

日本の生活が長かった彼女は、日本の習慣について、ときに私たちより詳しいことがあるのだが、その彼女が、日本の法事を羨ましく思っているというのである。彼女の国では、ということはキリスト教の国ではということだと思いが、亡くなると神のもとに召されてしまい、人界との繋がりは全くなってしまうのだという。日本では、初七日があり、四十九日があり、一周忌、三回忌、七回忌・・・いや、毎年のお盆やお彼岸、人によっては月命日まであって、故人と交流する機会がいくらでもあるのは素晴らしいことだというのである。

気がつくくと、いつの間にかお寺とのつき合いが、年中行事の中すっかりと組み込まれるような年になり、煩わしさを感じ始めていたところ、わが無知を恥じる次第である。

翌日は朝から冷たい雨が降っていた。長袖を着ても薄

寒く、改めて、ここが南半球であることに思い至るのだった。雨で寒ければ、妻の言う通り、この日も、どこにも行かないのでんびりするつもりだったが、六年生になる一人娘のロージーを学校まで送って行くというので、ついて行くことにしたのである。傘は必要だったけれど、それほど強い降りではない。少し前を行く母娘は、何事かぼそぼそと言葉を交わしていたけれど、はっきりとは聞こえて来なかった。間近に迫った、中学受験のことも話しているのだろう。それをめぐっての母娘バトルは、私たちの滞在中は一時休戦と聞いていたのだが……。観光地や繁華街で見かけるのは違った平凡な住宅街が却って物珍しく、辺りを眺めまわしているうちに、どこから集まって来たのか、辺りに子どもたちの姿が目立ち始め、大きな建物の前に来たと思ったら、そこがベイズウオーター小学校だった。

校門を入ってしばらく行った所で、賑やかな声が聞こえたかと思うと、ふわふわと風に漂うような一団が、校庭を横切って、私たちの方へ近づいて来るのが見えた。仮装行列のようなのだが、いまひとつしっくりこない。子どもたちは、Tシャツにジーンズという普段着の上に、ひらひらした薄手の布をまとっている。近づいて来たその姿をよく見ると、どうやらそれは、着物のつもりらしかった。前を合わせて、一応、帯のようなもので留めている。男の子

が頭に乘せているのは、ちゃん髷のつもりなのだろう。日本人の私たちが来ることを知って、和装で歓迎してくれているわけではない。私たちの訪問は突然だったのだから。この日、学校では「SHINU MATSURI（真珠祭り）」が行われることになっていた。

パースから、地図をインド洋に沿って北に辿っていくと、ジェラルトン、モンキーマイア、ポートヘッドランド……。とあり、その先、チモール海に近い所にブルームという街がある。そこでは、昔から真珠の養殖が盛んで、多くの日本人がパール・ダイバーとして働いていたということとは、何かで読んで知っていた。ブルームにある日本人墓地に埋葬されている人の多くは、潜水病で亡くなった人たちだということである。今でも、真珠養殖は、その街の重要な産業になっていると聞くと、昔のように日本とのつながりがあるのかは分らない。少なくとも、シドニーやゴールドコーストのように、日本人が押し寄せているとは聞かない。

それでも、「真珠祭り」は、西オーストラリア州の大ornaイベントの一つなのだろう。ブルームの街で行われる祭りに合わせて、そこから二十キロ以上離れているパースの小学校で「SHINU MATSURI」が行われるというのだから。

ノエルに案内されて、校長室に向かった。突然の訪問であったが、妻も私も教員であることが分かって大歓迎され、お土産のマグカップをいただくまでは良かったのだが、そのお返しに、「SHINU MATSURI」の会場で、スピーチをする事になった。芸は身を助けると言ったらいいのかわからない。附屬学校で校長をしていた頃に、突然、挨拶を振られるという経験をしていたので、その程度の依頼に動くことはしない。先ほど、校庭を横切ってやって来た、妙な和装の子どもたちの前に立って、「グッド モーニング、エブリバディ。マイ ネーム イズ・・・ ウィ ケイム フローム・・・」と形ばかりの英語の挨拶でお茶を濁した後を、子どもや保護者の前でのお手ものものに妻に譲ったのである。ノエルの絶妙な通訳もあり（彼女は、日豪政府間の会談で通訳を務めたり、日本からのテレビ取材に関して現地のコーディネーターを務めたりする、プロの通訳なのである）、何とか、「即席日豪民間教育親善大使」の大役を果たしたのである。

この日、私と妻が羽織っていたのは、メルボルンの植物園の売店で買った紺のフリースで、胸の部分に、黄色い花が刺繍されていた。それに気づいて指さしながら近づいて来た男の子に、「イエス、ワタルー。ナシヨナル フラワー！」と返すと、満足そうな笑顔を見せて戻っていった。

その服が効を奏したのか、講堂でのスピーチの賜物か、何処に行っても、みなフレンドリーだった。どの教室も、色とりどりの絵画や工作物で飾られており、子どもたちは、教室の片隅やホールで車座になってゲームをしたりするので、通常の授業日とは違っていることは分かったのだが、「SHINU MATSURI」の本体が何なのかは分からずじまいだった。

日本語の分かる人が誰もいないようなところで、「パール・フェスティバル」でなく、「SHINU MATSURI」で通用しているところが不思議だった。

どこにも行かないのでんびりすると言っていた割には、学校という場に身を置く血が騒ぐのか、子どもと保護者の前で一席ぶって目覚めたのか、妻は、生き生きとしてきて、雨も上がってきたので、午後は、パースの街まで買い物に行くと言い出したのである。

そのことをノエルに伝えると、駅まで一緒に行って、電車の乗り方を教えるという。「パースまで、大人二枚くらいなら言えるから」と断ろうとしたのだが、ベイズウオーター駅には駅員はいなし、切符の券売機も置いていないという。

家から十分ほどの所にある駅に行ってみると、確かに、

駅員の姿が見えないばかりか、改札口近くには券売機もない。代わりに、プラットホームのよく分らないところに、公衆電話を一回り小さくしたような金属製の箱が置いてあり、日本で、バスを利用するときと同じように、そこから整理券を抜き取り、下車駅で精算するのだという。乗ってしまえば十五分か二十分で、百五十万人都市パースに着くというのに、これではまるで、日に数本の電車しか停まらない人里離れたローカル駅といった感じだが、国土はわが国の二十倍、人口は五分の一というのは、こういうことなのだと思う。

パース行は、突然に、一方的に決まったわけでは、そこに特に用があつたわけではなく、少し遅い昼食をとつたり、我が国での来るべき冬に備えてムートンの室内履きを探したりして過ごしてきたのである。

帰りがけにパース駅前の大型スーパーで、夕食のための買い物をしていると、間もなく閉店になるというアナウンスが流れたが、時刻は、まだ五時前だった。デパートだつて八時、九時まで、コンビニなら終夜営業が当たり前前の国から来た者にとっては、この大都市で？・・・と少々の驚きだったが、こういうのが当たり前の生活というものなのだろつ。

この日の収穫は、自分たちだけで電車に乗れるように

ちできるよつになると、仕事のために、あるいは結婚を契機に、この街を離れて行つた。グラス氏は、そうした子どもたちの成長を見届けることなく、若くして亡くなつていく。

日本での留学を終えたノエルは、こちらに戻るとパースに居を構え、そこで、日本との交流を支援する事業を興した。実家のあるジェラルトンとパースとの間はおよそ五百キロ、移動には、飛行機を使うこともあつたよつだがほとんどは車だつた。

二十年前、私たち夫婦と子ども二人、それに妻の母親の五人でジェラルトンの実家に転がり込んだことがあつた。そこを起点にモンキーマイアまで足を伸ばし、帰りにもつ一泊お世話になつたのだつた。そして、パースに戻る私たちを、お母さんは、「分かる所まで」ということで、途中の分岐点まで見送りに来てくれた。一日、五百キロのドライブというのは、心身共に、かなり消耗する労働だということを知らされた旅だつたが、ノエルのお母さんは、高齢にも拘わらず、しばしば自分で車を飛ばして、パースまでやって来たという。この国の人たちにとっては、五百キロは隣町に行くような感覚なのだ。その元気だつたお母さんも、数年前に亡くなつた。

なつたということである。外国に来て公共交通機関が使えるようになる、急に世界が広がつたような気分がしてくる。小さな子が、しゃべれるよつになつたり、歩けるよつになつたりしたときにも、きつとこんな気分を味わうのだろつ。そうした気分がなくなつたうち、パースの先にあるフリーマントルまで足を伸ばすことにしたのである。そこにあるグラス家（ノエルの名字）の墓参りをするのが、ここへの旅の大事な目的なのだつた。

フリーマントルは、パースから電車で三十分ほどの所に位置するパースの外港である。

半世紀以上前、イギリスからやつて来たノエルのお母さんが、この国での第一歩を踏みしめたのはこの港だつた。その後、どういふ経緯でジェラルトンに移つたのか、教えてもらつたけれどよく覚えていない。娘時代のお母さんが、ハンサムで有名だつたグラス氏に口説かれたのは、ジェラルトンに行つてからと聞いている。そこで二人は家庭もち、四人の子宝に恵まれた。子どもたちは全員女の子、ノエルはその長女である。ハンサムなグラス氏は、街の名士でもあり、市議会議員を務めたこともあつた。街には、彼の名前を付した道路が残されている。子どもたちは、皆、学校を出るまではジェラルトンで過ごしてしたが、独り立

バイズウォーター駅に着くと早速トラブルが待つていた。前の日に、使用方法を覚えてもらつた整理券発行機が動いていないのである。機械の上に張り紙があり、故障なので、来た電車に乗つて目的地まで行き、そこで申告せよと書いてある。前日、経験済みだったので、状況はすぐに飲み込めたが、そうでなければ外出は取り止めになつたのだろつ。

電車に乗つていて、面白いポスターが目にとまった。網棚の上に貼つてある広告のうちの一枚である。一列に並んだ三匹のサルの絵で、左のサルは目に双眼鏡をあて、中央のサルの耳は顔よりも大きくデフォルメされ、右端のサルは、拡声器を口にあてている。「見ざる・聞かざる・言わざる」のバリエーション、北半球とは正反対の南半球パージョンとも言つたらいいのだろつか、キャッチコピーには、「人の迷惑になる行動を見たり聞いたりしたら、声をあげよう」とある。分かりやすいポスターと思つたが、どういふ人物が考えたのだろつ。「サル」の部分は、日本語でないと意味をなさない訳だから、見ざる・言わざる・・・は、国際規格というわけではあるまい。「コピーライターは、日本に来て、三猿の存在を知つたのだろつか。そして、かけ言葉のことは分かつていたので、その部分は無視して、猿の動作のみをモチーフにしたということなのか。

それとも、三猿自体が国際的な存在で、偶然に、日本語の「サル」を懸けたということなのだろうか？

整理券発行機の故障は、フリーマントル駅に伝えられていて、自己申告で簡単に外へ出ることができた。ノエル手描きの地図によれば、駅近くにある大きなマーケットをやり過ごして、住宅街を少し行った所に墓地はあることになっている。

地図を見て、現在地を確認していると、遠くから、火花が爆竹の炸裂音が聞こえて来た。音のした方に目を向けると、駅を出て来た人たちが、アーケードになった路地に吸い込まれて行くのが見えた。マーケットに人を誘い込むための爆竹だったのだろうと勝手な解釈をして、音のした方向に進むことにした。

路地を行く間にも、時々爆竹の音がしていた。やがて大きなサーカス小屋のような建物が見えてきた。雑踏、ざわめき、東洋風な香料の香り・・・二十年前に買い物をしたのも、確かこんな雰囲気のところだ・・・墓地は、マーケットの先の方ということだから、ここで買い物を買って、その先へ抜け出ることができれば都合がいい・・・。

マーケット前は、まるで縁日のようだった。こつこつ所に来ると、改めて、この国が移民の国であることに気がつ

にキーボード。人込みをかき分けて進むと、演奏している人たちと同じような恰好の中年の男が、古いジャズに合わせて体をくねらせてリズムをとっている。

すぐ近くでは、一人の男が、何本ものナイフを、キャッチボールのように投げたり受け止めたりしている。二階まで届くような丈の高い自転車を持ち回り、身体にびつたりした艶めかしいウェアを身につけ、柔らかい体を蛇のように男に巻きつけるようにしたり、肩や頭の上で逆立ちをしたりしている女、色とりどりの風船を子どもたちに配っているピエロ・・・皆、生活のためと言うより、楽しみでやっている感じだが、それでも路上に置かれた帽子には、紙幣やコインが投げ込まれている・・・。

マーケットの入り口近くに人だかりがしているので、近づいて見てみると、手師のパフォーマンズだった。入口脇の一面に、カラフルなカーテンで仕切られたスペースがあり、エキゾチックな容顔の男と女が、光沢のある青地に金銀を施したカラフルな衣装を身にまとい、怪しげな様子で、周囲に挑戦的なポーズを取っている。テーブルにかけられた布の、「マジック！」という文字だけが読めた。

昔から、手品を見るのが好きなのである。新聞のテレビ欄で「超魔術」などと見かけると、必ずチャンネルを合わせてしまう。別に、タネを見破ろうというのではない。

かされるのだった。中国、東南アジアのものが多く、中東産と思われるものも目につく。物珍しさにきよるきよるしたり、二十年前の記憶と照合しようとしていたりしたせいだろう、マーケット前の広場に出た所で、全身を真白に塗り、ピクリともせず立っている石膏像になりきった男に危うくぶつかりそうになった。道の反対側に、真っ黒に塗って立っているのはブロンズ像のつもりだろう。カナダに行ったときにも、同じようなパフォーマンズを見たけれど、日本では見たことがあったろうか・・・？

妻から、「よそ見をしながら歩くと危ないわよ」と言われたが、「よそ見をしながら歩くのが、こつこつときの流儀なのだ」と思いながらも、それは口にしないで、「前に来たときにも、こんなお祭り騒ぎだった？」と尋ねると、

「マーケットで買い物をしたとき、ずいぶん混んでいたのは覚えているけど、外はどうだったかしら」

とよく覚えてはいないようだった。

「大道芸がいたというのは覚えていないなあ」

「ストリート・ミュージシャンがいたのは覚えているけど・・・」

ざわめきや歓声に混じって、今日も音楽が聞こえて来た・・・ドラムとベースとサクソ、それにピアノの代わり

鮮やかなお手並みに騙されるだけで満足なのである。大がかりな仕掛けのあるものより、手先の技術と巧みな語りで騙されるのがいい。妻は、反対で、騙されるのが好きとか嫌いとかいっているのではなく、目の前で起きた不思議なことについて、納得できる説明をしないままにしておくことが我慢ならないというのである。ものごとを曖昧にしておけない性分と言えば、そういうことになるが、それでは手品は楽しめない。出し物ごとに、今の不思議はこつこつことになっているのです・・・などと種明かしをしていては、手師の商売はあがりとなるばかりでなく、ダジャレを言っただけで一々その説明をするのと同じになってしまう。

男が、赤や青のボールを、自分の身体のあちこちに手を持って行っただけで、出したり隠したりしている。ときどき観客に隠した場所を当てさせようと指名するが、もちろん誰も当てることができない。バケツに入れた水を観客に向かって浴びせかけたかと思ったら、水は何処へ消えたのか紙吹雪が舞った。観客から預かった紙幣をびりびりに破いて、空中に撒き散らし、そのままのマジックへ移ろうとして、件の観客が大声を出し、周囲が大笑いをするという一幕もあった。

しばらく私が動きそうにないと察した妻は、「まだ続きそうね。戻るまでここにいて」と言い残して、マーケット

トの中に入って行った。

観客との掛け合いのマジックが続いていた。

カードを用いたマジック、コインを用いたもの、紐を用いたものと、いわゆるテールマジックが得意なようだ。客から預かったボールペンが、ホットドッグのソーセージのように、パンの中から出てくるというマジックは不思議だった。どんなタネが仕掛けられているのか、気にならない訳ではないが、見事なお手並みには拍手するしかない。

いつの間にか、最前列に来てしまっていたので、少し場所を変えようとしたとき、男に手招きされたのだ。男の脇まで来いという。男は、長細い箱を持ち出すと、そこに少し大きめのズッキーニのような野菜を入れ、ギロチン台で首をはねるように、箱についているカッターでスパンと真つ二つにした。その箱に、今度は私の腕を入れるというのだ。何か仕掛けがあることは分かっているけれど、気持ちのいいものではない。とつさに、ああ、この腕は日本に持って帰らないといけないので・・・などと気の利いたセリフは出て来ない。躊躇している、箱の反対側から女が手を入れ、私の方に伸ばして来た手で握手をするようにして私の手をつかむと箱の中に引き込んだ。間髪を入れずギロチンが降りた。こちらがぼんやりしていたからなのか、女の力が存外に強かったからなのか、一瞬のできごとだった。

た。箱を開けると、そこにはあるべき腕が見えない。でも、私の掌には、ひんやりとした女の手の感触が伝わって来る・・・

もう少しそつしていてもよかったのだが、男に握手をされ、女の頬が私の頬に軽く触れ、元いた方に戻されたのだった。戻るときには、もちろん、腕をさすって、その存在を確かめることは忘れなかった。

妻が戻って来たのは、手品が終わわり、男も女も姿を消してしばらく経ってからのことだった。

「昨日の、真珠祭りに続いて、今日もまた、飛び入り参加だった」

と、ショウの一幕を告げると、

「恥ずかしいから、やめてよ、そういうのは・・・」

と一緒にいなくて良かったといった口ぶりである。

「抵抗はしたんだけど・・・」

「誘ってほしそうな顔をしていたんでしよう・・・それよりも、この中、まるで迷路よ。帰りの道がなかなか見つからなくて・・・」

墓地はマーケットの先のはずだから、買い物しながら、反対側から出てみよう・・・」

入ってみると、エキゾチックな香料の香りが漂ってきた。アロマテラピーの香りだろうか。店先に吊るされている

る色とりどりの布は、カーテンかテールブルクロスか。どれも鮮やかな色遣いで、幾何学模様も動植物を図案化したモチーフも、東南アジアか中東のものだろう。

妻の言う通り、確かにそこは、迷路のよう、いや迷路そのものだった。似たような品物を扱っている店が多いこともある。店と店の仕切り、店と通路の堺がはっきりしていない上に、人も混んでいて、なかなか全体を見通すことができない。

「何だか、まだ、手品が続いているようだ。同じ所をぐるぐる回っているような気がする・・・」

「そつでしよう？さつきもそつだったのよ。珍しいものが次々に目に入って来るので追いかけていたら、どこにいらんだか分からなくなってしまっただけ・・・」

こつちのＴシャツ屋、あつちの雑貨屋、隣の食料品店・・・と渡り歩いているうちに、完璧に道を見失っていた。同じ所を何度も通ったり、同じ所と思って角を回ってみると、初めて目にする店の前に出たりと、自分たちがどこにいるのか分からなくなっていた。建物の中のことなので、道に迷ったとしても高が知れていると言われればその通りだけれど、自分のいる所がきちんと定位できないというのは、不安なものだ。一度外へ出て原点を決めて、座標軸を作り直したいのだが、肝心の出口が見つからない。

何度も、同じところを歩いて、自分たちが完全に迷子になっていることを理解したころ、人混みの先に、外から光が差し込んでいるように見える所があったので、そこを目指したのである。そこは、建物の裏手に当たる所で、結果的に、マーケットを突っ切ることが出来たのだった。

駅の方から見たときには、建物の陰になって気づかなかったが、マーケットの裏手にはなだらかな斜面が広がっていて、丘陵地を越えて向こう側へと続く大通りの両側には、同じような造りの住宅が、午後の日を浴びて並んでいた。墓地は、丘陵地を登りきった所、住宅地の外れにあるようだった。

しばらく歩いて気づいたことだけれど、道の両側の住宅からは、時々、犬の鳴き声がするくらいで、人の声もしなければ、そこに人の姿を見ることもなかった。坂を登って来た車は、そのまま丘陵を越えて走り去って行く。どの家も建てて間もない感じなので、ゴーストタウンということではないだろうが、人の気配がしない。もっとも、日本では夏休み真っ只中だけれど、こちらは仕事の真っ只中で、昼間からブラブラしている人がいないのが当然なのかもしれない。

丘陵をかなり登った所で住宅が途切れ、丈の低い灌木

に囲まれた一画の前に出た。囲いに沿って丈の高い木々が並木を作っていたり、囲いの中には、鎮守の森のような木々の群落も見えたりしていた。そこが、目当ての墓地のようだった。

墓地と言うと、つい自分の家の菩提寺にあるような、墓石と塔婆の林立した、どちらかと言うと湿っぽい場所を連想してしまうが、この墓地は、芝生の上に平べったい石が置かれているだけなので、どこかあっけらかんとしていて、公園だと言われれば、そんなだろうなと思えてしまつような佇まいだった。

灌木の囲いの先に、こんもりとした林が見えてきた。その間を道が通っていて、門があるわけでも、案内係がいる訳でもないが、そこが入口らしかった。道を辿って行くうち、冷気が増してくるような気がするの、ここが墓地だからだろうが、陽が少し西に傾いて来て、実際に気温が下がってきたからだろうか。

ずいぶんと広い墓地だったが、区画や通路が、数字とアルファベットで整然と表されていて、迷うことはなさそうだった。いや、正確に言つと、途中までは分かりやすかったと言つべきか。縦横の通路が直角に交わっていて、区画ごとに数字もアルファベットも、順序良く並んでいたが、間もなく目当ての区画になるはずという所へ来て、突

如、それまでとは連続しない並びになったのだった。よく見ると、それまでの看板の目の通路がそこで終わり、斜めの道と交るようになっていたために、連続性が保てていないのだった。

しばらく、その斜めに交わる通路を行ったり来たりして、目指す区画を探したのである。そこはそこで、整然としているので、すぐに分かるだろうと思つたのだが、アルファベットも数字も、それまでとはまったく異なる並びになっている上に、当たり前のことだけれど、一面、似たような墓石の連続で、気づくと自分たちの居場所を理解するための手掛かりが全くなつてしまつていた。まるで、マーケットでの続きをやっているような感じだった。

少し見通しの良い所に行つてみようとしたとき、妻が突然「海が見える」と言つたのだった。いつの間にか、丘陵の稜線を越えて、反対側に来ていたようだ。後で確かめてみて知つただけけれど、斜めに交わっている通路は、ちょうど稜線上にあつて、そこを境に、私たちが歩いてきた区画と、海へ向かつてなだらかに下つてゆく区画とに、墓地が二つに分かれるようになっていたのである。

まだ、それほど午後の遅い時刻になっていなかったにも拘わらず、日差しが急に弱くなつたような気がした。私は、冬至前後のひと月位の、午後二時―三時頃の日の

光が、どうも好きになれないのである。その理由を尋ねられても、うまく答えられない。まだ、夕方には早いのだが、弱まった光はすでに夕方を示している・・・現実の時間と日差しから受ける印象のズレから生じる不協和感とも言つたらいいのだろうか。南半球なら、八月の今頃がそれに該当する。辺りの木々を照らす光に目をやりながら、帰りの相談を始めたとき、妻が、「何か聞こえてこない?」と言つたのである。

「車の音?」  
「分からないけれど・・・人の声じゃないかしら・・・先の方よ・・・」

言われた方に目をやると、ユーカリの大きな間に、こちらと同じように、地面に平たく置かれた墓石が並んでいるのが見えただけで、特に動くものも見えなかった。

「ほら、また聞こえたわ・・・人声よ・・・」  
今度は、私の耳にも聞こえた。人の話し声というよりは、大勢集まつてざわめいているといった感じだった。

「何か出てくると嫌だから・・・もう戻ろうよ」  
と妻に、

「まだ、そういうのが出る時間ではないだろう・・・」と言つてはみたものの、私もそういうのは得意ではない。ましてや、外国語で出て来られたら、どう受け答えしたらいい

いのか・・・

そのとき、道の先に、何か動くのが見えた。白っぽい、ふわふわとしたものだ。近づくとつれて、それが人間の一回らしいことが分かつてきた。さらに近づくと、その姿には、どこか見覚えがあつた・・・デジャ・ビユー・・・どうしてまた、こんな所で・・・?

すれ違ふとき耳をそばだてていると、「しんじゅまつり・しんじゅまつり・・・」と口をそろえて歌っているように聞こえたけれど、空耳だったろうか。ここは、ブルームではないが、真珠産業関連の人が眠っているということなのか。いや、お盆も、お彼岸もない国なのだ、墓地でそうした催しをすることはあるまい・・・とすると、この子たちは一体誰?

私たちの目の前を進んで行つた一回は、その先の角を曲がり、視界から消えていった。一回が曲がった角まで行つて見ると、その先の方に、出口らしい空間が見えていた。ときおり、そこを横切る車が見えたが、子どもたちの姿は見えず、声も聞こえて来なかった。

完